加藤周一著作集

3

加藤周一著作集

日本文学史の定点

3 加藤周一著作集

日本文学史の定点

加藤周一 編集

平凡社

加藤周一著作集3（全15巻）
日本文学史の定点
一九七八年十月二十日　初版第一刷発行
一九七八年十一月七日　初版第二刷発行

著者　加藤周一（かとうしゅういち）
装幀　池田満寿夫
発行者　下中邦彦
発行所　株式会社　平凡社
〒一〇二　東京都千代田区四番町四
電話　〇三（二六五）〇四五一
振替　東京八一二九六三九
印刷　明和印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社
定価　一八〇〇円

© 加藤周一　1978　Printed in Japan.
製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい（送料小社負担）。

目

次

I

日本文学史の方法論への試み　5
果して「断絶」はあるか　29
古典の意味について　58

II

親鸞　93
一休という現象　143
世阿弥の戦術または能楽論　188
新井白石の世界　225
富永仲基と石田梅岩　295

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

Ⅲ

宇津保物語覚書　359
絵巻物と文藝　363
一三世紀の海外旅行　368
日本文学の伝統と「笑い」の要素
死の見方・江戸時代と近代　381
あとがき　389
初出一覧　391

加藤周一著作集　3

日本文学史の定点

I

日本文学史の方法論への試み

1

日本文学史の著作として世評定ったもの数冊にあたり、どのような作品が選ばれているかを調べてみると、自ずからそこに想定されている日本文学の「全体像」があきらかになる。その「全体像」を、実際に存在する作品群に比べれば、或る種の文学には全くといってよいほど文学史上の市民権が認められていないことがわかるだろう。これは以下の三つのジャンルで最も顕著である。

一、文学理論を除く理論的作品。特に鎌倉・室町時代の僧侶、徳川時代の儒者、および近代の或るイデオローグらの著作。例えば、法然、親鸞、日蓮、道元をひっくるめても、たった一人の詩人への言及に及ばぬというようなことが珍しくない。また例えば西鶴についてあまり丹念に叙述するために、新井白石にはもはや紙面を残さぬことになる。同様に小説家岩野泡

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

鳴の作品と比べて、内村鑑三の卓越した散文はとかく正当な評価を受けにくい。

二、漢文による作品。漢文による文学的著作は文学史からほとんど完全に除外されていて、日本文学のかなりの部分、それも重要な思想的遺産を含む部分が脱落している。けだし僧侶と儒者はその理論的著作を主に漢文で書いた。殊に室町期禅林の文学全体、また江戸期の漢詩人達。しかるに文学史的著作は、漢文学に言及するとしても、附録に於て他の文学とは全く関係がないかの如くに記述されるに止まる。愛すべきところはあるが時代への影響という点でさほど重要でない俳人小林一茶をうんざりするほど入念に叙述しながら、同時期にはるかに大きな影響力をもっていた頼山陽をあっさり片づけるのが今までの文学史の習慣である。

三、大衆文学。たとえば室町時代の仮名草子、徳川時代の川柳、雑俳、滑稽本は、最近、詳しく叙述されるようになったが、その解釈には誤りがあると思う。これらの文学は、文学作品として取るに足りず、価値がないとされており、その文学の社会的・歴史的役割は無視されたままである。徳川時代の詩人や批評家たちがもっていたのと同じ偏見が、今なお力をもっているらしい。最近の大衆文学についてみても、中里介山はほとんど無視されている。菊池寛の場合にも、文学史の上では、もっぱらその初期の作品、短篇や戯曲のみが問題とされ、はるかに大衆性を持っていた後期の長篇小説は触れられることがない。

従来の文学史の叙述が以上のような欠陥をもつために、日本文学は本来の姿に反して思想的実質に乏しいものとみなされがちである。元禄期の文学が、芭蕉・西鶴・近松によって代表され、

白石・徂徠を含まぬものとすれば、思想的内容に乏しいのは、わかりきったことである。一七世紀の日本文学が、同時代のフランス文学よりも、思想的に貧しいのではなく、白石・徂徠を無視する日本の文学史家の方法が、デカルト・パスカルを特筆大書するフランスの文学史家の方法とちがうのである。

さらにこのような文学史の書き方は、日本文学が民衆の生活感情を受け止め表現する力に乏しかったとの印象を与えかねない。『源氏物語』をことごとしく称揚し、その反面『今昔物語』を過小評価することが当然のこととされ、また、狂言が独立した演劇形式として認められず、蜀山人というような人の作品が芭蕉のそれに比べて正しく評価されぬ事態が続く限り、この印象は拭われぬままであろう。

要するに、これまでの日本文学史は、卓越した思想家の知的活動や一般民衆の生活感情をまともに考えに入れぬ文学概念に基いて書かれてきた。これは文学の簡単明瞭な定義を可能としたが、文学からその本質的部分を欠落させることにもなった。

さてこのように狭く片よった文学概念を生みだした精神的土壌は何であったか。それはいうまでもなく、現代日本の精神状況一般に他ならないが、殊にそのなかでの三つの要素、即ち、儒教、国学、および明治の著述家達が熱心に取り入れようとした一九世紀ヨーロッパの文学概念が重要である。

中国と徳川時代のわが国の文化を支配した儒教的文学概念は、いわゆる「詩文」のみを、つま

り古典的文語で書かれた詩・歴史・論文・随筆の類のみを評価して、口語による長短篇小説には文学的価値を認めなかった。このような文学概念によって、中国の文人やわが国の儒者は、「文学」を独占することに成功したのである。

国学の伝統、特に本居宣長の学説は、幕藩体制の公教となった儒学や、信仰としてはさして力を持たなかったが儀式・制度の面で宗教生活になお支配的であった仏教になじまず、これらとあらがう動きを刺戟し、これに活力を与えた（国学の伝統が、明治維新後は現実と相渉る力を大幅に失ったことは言うまでもないが……）。

ヨーロッパから取り入れられた思想について言えば、近代日本における「文学」の概念を限定した二つの考え方がある。その一つは、作者の自己表現を重じ、文学作品の独創性を強調する考え方であり、もう一つは「ローマン的疎外」なる言葉でほぼおおい得る考え方で、藝術家の市民社会に対する立場に係っている（藝術家の孤独の強調、俗物との闘い、市民社会の軽蔑、「呪われたる詩人」という考え方など）。

文学を一人の人間の個性の表現とする考えは、中国の古典的伝統の形式主義とは相容れない。しかも宣長の後継者達は、国学の反儒学的態度を受けついで、儒者の作文を文学の領域から追放しようとした。一方、著しく世俗化した一九世紀ヨーロッパ文学に触れ、これを積極的に評価した近代日本は、文学作品として興味深い仏家の著作をも、肯定的態度で迎えることができなくなった。また仏教文学の評価という点では、国学の伝統が否定的影響を及ぼしたことは言うまでも

ない。

明治期の日本に於て、ヨーロッパの文学概念は、口語で書かれた文学、中でも徳川時代に大衆に広く浸透した小説類に対する、中国文学の伝統に根ざした過小評価を修正するのに極めて重要な役割を果した。口語は文学の表現手段として認められるようになった。明治の総体的な社会的文化的変革が進行する間に、無数の小説が書かれ、広く国民大衆に読まれるようになった。そして近代小説に、時代の要請に応える理論的支柱を与えたのが、坪内逍遙の『小説神髄』であった。

しかし、こう言ったからと言って、ヨーロッパの文学概念があらゆる局面で、中国文学の伝統にとって代ったということにはならぬ。むしろヨーロッパ的な理念のあるものは、既存の傾向の強化をうながした。例えば、詩人の「ローマン的疎外」や(選ばれたる者の)「美しい孤独」という考え方は中国文学の古典的理念を新たに正当化する結果となり(けだし中国の詩人—学者は特権階級に属していたのだから)、一般民衆と大衆文学を疎んずる傾向を強めた。かくて、明治の文学者達は、はじめから読者を眼中におかない「文学」の創造に意をそそぎ、明治の文学史家もこのように考えられた「文学」概念から出発して、文学史の理論的基礎を築こうと努めた。一般民衆の生活に根を下した文学が、わが国の文学史で名誉ある位置を占める機会はほとんどなかった。

第二次大戦後、それも特にここ一〇年間に、日本文学と取り組むにあたって新しい傾向が目立ってきた。すなわち、文学研究の対象を拡め、これまで見過されてきた仏家や儒者やその他の思想家達をも、文学史の上に位置づけようとする傾向である。文学の領域をこのように拡張するに

力のあったのは、精神史への関心に目覚めた若い文学史家や批評家達であった。そのときすでに、歴史家、社会学者、言語学者、哲学者、藝術史家といった人達は、従来文学史家によって看過されてきた文学作品の多くを視野に収め、各自の専門に固有の方法で分析していた。文学史の領域の拡張は、あらかじめ準備されない前人未到の世界で突然起ったのではない。

このような一般的傾向は、第二次大戦後のわが国の精神状況と深く係っている。知識人にとっては、戦時中の文化政策に由来する日本精神史の全体像の歪みを訂正することが、焦眉の課題であった。また、敗戦の悲惨な結末の原因を、単に政治・社会的状況からだけではなく、わが国の精神史そのものから解明し、社会に於る文学の役割をあらためて明確なものにしたいという動機もあった。更に、戦後のわが国の指導的知識人が当然手をつけねばならぬ仕事としてあったのが、占領軍によって実施された社会・制度およびイデオロギー上の改革に対して、日本の文化的伝統に新たな照明を与え、当時希望をかけられたように、新しきものと古きものの綜合から、民族のアイデンティティを再発見することであった。このような前提のもとで文学批評がまっさきになすべきことは、戦時中に利用された国学を客観的にみなおし、儒学の伝統を再吟味し、わが国の文化史に占めた仏教の役割を明確に捉えなおすことであったろう。その結果、従来圧倒的に高く評価されて来た平安時代の物語や江戸俳句の唯美主義は、相対化された。

この新しい傾向は、大衆文学の研究にどのような影響を及ぼしたであろうか。すでに戦前、折口信夫は民俗学的史料を援用して、古代日本文学の新たな解釈の途を拓いた。文学を社会全体と

の関連に持ち込んだことによって、折口の仕事は旧来の轍を破るものであった。戦後、一連の学者達により、文学と民俗学の限界領域で折口の研究がさらに推進せられると共に、その面からも、日本文学史の根本概念があらためて問われることになった。周知のように、それは主として、古代文学の解釈に係るものであった。

近代文学については、『思想の科学』グループの若い研究者達が、大衆文学、殊にその長篇小説の系統立った分析に手をつけた。彼らのうちで最も重きをなす鶴見俊輔は、第一次大戦から現代に到るまで、日本における理想的な人間像の変遷に、大衆小説研究の持つ意味の重要さを証明してみせた。この種の研究を継続させ、歴史叙述に織り込んでゆくことは、今後の世代に受けつがるべき課題であろう。

とにかく、文学の伝統的領域の拡張は緒についた。そこで新たな文学史を書くためには、新しい概念の枠組、方法論を必要とする。

まず最初にしておかねばならぬのは、文学の概念を拡張し、新しいより豊かな内容をその中に包みこめるようにすることである。しかし「文学」の一般的な定義を試みるのは、大きな仕事である。ここでは、わが国の特殊な場合について、文学の歴史を叙述するのに、直接に役立ちそうな若干の要点を指摘することで、満足するほかはない。

これまで広く受け入れられてきた定義によれば、「文学」は一般に「藝術」なるものの一つの形式とみなされる。したがってその価値は、他の藝術——音楽・絵画・彫刻その他と共通する指標

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo